

# 農作物への当面の技術対策

平成28年6月30日  
農業技術課

## 1 気象予報

平成28年6月30日16時30分の気象庁予報部発表「関東甲信地方週間天気予報」(予報期間 7月1日から7月7日まで)では、  
「向こう一週間は、梅雨前線や湿った空気の影響で雲が広がりやすいですが、明日(1日)は高気圧に覆われて晴れる所もあるでしょう。  
最高気温・最低気温ともに平年より高く、かなり高い日もある見込みです。  
降水量は、平年より少ないでしょう。」  
となっています。

○甲府地方気象台7月1日5時発表 山梨県の週間天気予定表

7月1日5時 山梨県の週間天気予報

日付	1 金	2 土	3 日	4 月	5 火	6 水	7 木
山梨県 府県天気予報へ	晴時々曇 	曇 	曇時々晴 	晴時々曇 	曇時々晴 	曇 	曇 
降水確率(%)	-/0/20/20	10/10/10/10	30	20	30	40	40
信頼度	/	/	A	A	B	C	C
甲府	最高(°C)	32	34 (30~37)	33 (29~35)	32 (28~35)	31 (27~34)	30 (26~33)
	最低(°C)	/	22 (20~23)	24 (21~25)	23 (21~24)	22 (19~23)	21 (20~23)
平年値	降水量の合計		最高最低気温				
甲府	平年並 13 - 35mm		最低気温 20.6 °C		最高気温 29.3 °C		

7月1日以降は最高気温が30°C以上の日が続く予報がされています。

## 2 技術対策

急激な温度変化と高温、今後心配される少雨による農作物への影響を軽減するため、次の技術対策を講ずる。ただし、予報に反して曇雨天が続いたり、集中豪雨が発生した場合には臨機応変に対応する。

### (1) 果 樹

#### 1) 共通事項

- ・乾燥防止対策として、土壌の乾燥具合を確認し、乾燥している場合には、定期的な灌水に努める。成熟期の園では約5日間隔で20mm、果実肥大期の園では4~5日間隔で30mm、収穫後の園(施設栽培を含む)では約7日間隔で30mmを目安に灌水を実施する。
- ・樹冠下は敷ワラ、敷草を実施するとともに、草生栽培園では草刈を励行する。
- ・灌水施設等のない園は、樹冠下を中心に1樹当たり200~300リットル灌水する。
- ・害虫の発生が地域により多い傾向にあるとともに、今後、高温で経過するとアザミウマ類やハダニ類の発生が多くなるのが懸念されるため、定期的な防除を徹底する。特に、ハダニ類の発生が見られる園では早急に防除する。なお、多発してからでは防除効果が劣るため、初期防除を徹底する。

## 2) モモ

- ・着色期の過度な葉摘みや新梢（徒長枝）の剪除は避ける。
- ・反射マルチを敷く前に灌水を行う。
- ・反射光の強いマルチは、日焼け果などが起きやすいので、白色マルチを使用するか、反射マルチを敷く量や反射程度（古いマルチや裏面使用）を調節する。着色が進み次第早めに反射マルチを除去する。
- ・下垂枝への支柱やつり上げにより、反射マルチとの距離を確保する。
- ・日持ち性向上のため、収穫は気温の低い朝に行う。
- ・果実硬度2～2.5 kgを目安に適熟収穫に努める。なお、最高気温が35℃前後になると、着色が遅延する傾向があるため、熟度に注意して収穫を行う。

## 3) ブドウ

- ・着色期のブドウは、夜温低下による着色向上を図るため、夕方のほ場散水（5mm程度）や棚面への散水（200リットル/10a）を行う。
- ・着色始めに果房が高温とならないように、過度な新梢の切除や摘葉を控え、必要以上に棚面を明るくしない。
- ・高温が続く場合は着色不良になりやすいので、早めの除袋を行うが、果房に直射が当たる場合は、クラフト紙のカサかけや誘引の見直しを徹底する。
- ・結果過多園や樹勢低下樹では、早めに見直し摘房を行い、着色向上に努める。なお、玉張りが平年より良好な園では、結果過多とならないように注意する。
- ・新梢伸長が続いている樹は、ベレーゾン期前か、着色が全体に回った時期に、新梢先端の摘心と副梢を2～3枚残して摘心し、着色向上と養水分の競合を防止する。
- ・収穫の終わったハウス栽培においても、定期的な灌水を徹底する。

## 4) スモモ

- ・着色期の過度な葉摘みや新梢（徒長枝）の切除は避ける。また、特に大玉品種では日焼け防止、果実の軟化予防のため、直射日光が果実にあたる場所には、カサかけを行う。
- ・収穫期前に日焼け症状が発生した園では、日焼けした果実が腐敗していない限り収穫期まで着果させておく。
- ・日持ち性向上のため、収穫は気温の低い朝に行う。
- ・収穫期に高温が続く場合、過熟果の発生が心配されるので、着色にとらわれず、果実の弾力と熟度を優先した収穫に努める。

## 5) オウトウ

- ・花芽分化期以降の高温、乾燥は翌年の双子果の発生原因となるため、定期的な灌水と敷ワラ等により土壌乾燥を防止する。
- ・ハダニ類の発生に注意し、収穫後も定期的な防除に努める。

## (2) 野菜

- ・土壌が極端に乾燥する前に灌水を行う。
- ・地温の上昇と水分の蒸散を抑えるため、敷きワラや敷き草を行う。
- ・果菜類では、着果負担を軽減し草勢を維持するため、不良果（奇形・変形果等）は早めに摘果し、健全果（良果）は肥大し過ぎないように収穫を適期に行う。
- ・草勢の回復を図るため、必要に応じて液肥の葉面散布を行う。
- ・アザミウマ類、ハダニ類、ヨトウムシ類、オオタバコガなどの害虫の発生が予想されることから、防除を徹底する。

- ・夏秋なすでは、つやなし果の発生を防止するため、整枝、摘葉などを徹底し、葉面からの蒸散量を抑える。畝間灌水をする場合は、地温が下がる夕方に行い、翌朝には水がなくなるようにする。
- ・夏秋トマトでは、ホルモン処理を徹底し、着果促進を図る。また、カルシウム剤の葉面散布を行い、尻腐れ果の発生を予防する。

### (3) 花 き

#### 1) 共通事項

- ・アザミウマ類、ハダニ類の発生が増加するため、発生状況を把握し、初期防除に努める。

#### 2) 施設花き

- ・寒冷紗などで、強めの遮光をするとともに、強制換気に努め、葉面温度の上昇を防止する。
- ・朝夕に灌水を行う。

#### 3) 露地花き

- ・敷きワラ、敷き草を行い、朝夕に灌水を行う。

### (4) 水 稲

今後、穂肥の施用時期を迎えるが、栄養不足になると胴割れ粒の発生を助長するので、葉色を見ながら適期に施用する。

### (5) 茶

敷草を行い乾燥防止を図るとともに、定期的な灌水に努め樹勢の維持を図る。

## 熱中症対策

暑熱環境下での作業は、熱中症（熱射病、熱けいれん、熱まひ）を生じる恐れがあるので、次の事項に注意する。

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行う。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給する。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に気を付ける。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をする。  
作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努める。
- 屋内では遮光や断熱材の施工等により、作業施設内の温度が著しく上がらないようにするとともに、風通しをよくし、室内の換気に努める。  
作業施設内に熱源がある場合には、熱源と作業者との間隔を空けるか断熱材で隔離し、加熱された空気は屋外に排気する。

## 農作業中の事故防止に向けて

山梨県農作業安全推進会議では、毎年6月と10月を農作業安全強化月間と定めていますが、今年の死亡事故が多発している状況を受けて、6月の強化月間を1ヶ月間延長し、7月31日までとし、あわせて、本県における事故の特徴を踏まえ、以下の重点啓発事項を設定しました。

日頃から慣れた作業でも「大きな事故につながる恐れ」がありますので、十分に注意して安全な作業に心がけてください。

# 農作業事故防止に向けた重点啓発事項

山梨県 農政部

## 共通事項

- ・できる限り、一人での作業は行わない
- ・作業時は安全に配慮した服装を心がけるとともに  
ヘルメットなどの防護用具を着用する

### 1. トラクター、農業散布車の転落・転倒事故の防止

- ・走行中、作業中にスピードを出しすぎない
  - けん引中、乗員の積載時は特に注意する
- ・土手などへの乗り上げ、脱輪による転倒に注意する
  - ほ場や移動路の危険箇所を確認、補修する
  - 除草などにより危険箇所がわかるようにする

### 2. 農業機械(垂用草刈り機、運搬車、耕うん機)との挟まれ事故の防止

- ・走行・作業中は常に周囲に注意する
  - 低い枝や支柱の近くでの走行・作業を避ける
  - 危険箇所にはあらかじめ目印をつけておく
  - 耕うん機(管理機)では、特に後進の際に注意する

### 3. 高所からの転落事故の防止

- ・脚立での作業は安定した体勢で行う
  - 安定した場所に開脚防止チェーンを掛けて使用する
  - こまめに移動し、無理な体勢で作業しない
- ・高所作業車は安全を確認しながら使用する
  - 凹凸のあるほ場では、転倒の恐れがあるので使用しない
  - 作業台を上昇させたまま走行しない
  - 走行中は、枝や支柱等との接触、挟まれ事故に注意する

**農作業中の熱中症にも注意しましょう**

山梨県農作業安全推進会議